

生活保護世帯の子どもの日常生活と進路選択過程に関する考察

A Study on the Daily Life and Career Choices Process of Students who live in Households on Welfare

林 明子¹, 酒井 朗¹, 岡 健¹, 保坂 亨⁴, 木村 文香⁵

¹人間文化研究科人間生活科学専攻, ²千葉大学, ³江戸川大学

キーワード：生活保護世帯, ライフストーリー, 進路選択過程, 後期近代, 自己アイデンティティ

1. 研究の目的

本研究は、経済的に不利な状況におかれている家庭の子どものライフストーリーに着目し、なぜ彼/彼女たちが社会的に不利な進路選択をするのかを明らかにすることを目的として進められた。現在、日本の高校進学率は98.0%に達している(平成22年度学校基本調査)。しかし、たとえば生活保護世帯の子どもの高校進学率はおよそ85.0%前後にとどまる(高橋ほか編2009)。また、定時制・通信制高校に進学する者も多い。階層と学力の相関関係については既にさまざまな研究蓄積が存在するが、当事者の経た具体的なプロセスや認識は十分に明らかにされていない。経済的に不利な状況にある子どもたちがどのような生活を送っており、高校進学をどのように経験しているのかを理解しなければ効果的な支援が構築されることも難しい。

そこで本研究では、生活保護世帯の子どものライフストーリーから、彼/彼女らの日常生活および高校進学の実験のされ方とそれらの語られ方を分析することで、それぞれの出来事の重層的で連続的なつながりを見出し、考察を行なう。本研究は、「子どもの貧困」に社会的注目が集まるなか、彼/彼女らに対する支援構築のための重要な基礎的研究のひとつとして位置づけられる。

2. 活動実施報告

1) 調査対象者・調査方法

調査対象者は、首都圏X市Y地区の生活保護世帯の高校生(1年生~3年生)12名(男子4名, 女子8名)である(表1)。

表1 調査対象者一覧

	全日制普通科	全日制専門学科	全日制総合学科	定時制	高等専修学校	非進学
男子	1	1	0	0	2	0
女子	2	1	1	3	0	1

筆者は、首都圏X市Y地区の学習支援事業に参加しており、そこから個人的にインタビューの依頼を行なった。同地区の行政担当者に依頼し、調査をしたところ、同地区には117名の高校在籍者がおり(2010年4月現在)、そのうち全日制高校に在籍している者は58.2%、定時制高校に18.8%、通信制高校12.8%、特別支援学校8.5%、高等専修学校1.7%であることが明らかとなった。また全日制高校に在籍している者68名のうち、51名は入試偏差値が50以下の高校に在籍していることから、全日制高校に進学していたとしても学力には相当の偏りが見られることが分かる。

調査対象者に対して、1人平均2回、各々約1時間半のインタビューを実施した。インタビューを始める際には、研究目的やプライバシー保護について説明し、ICレコーダーでの録音と公表の仕方について許可を得た。また学習支援事業にかかわっている地方行政機関およびNPOなどの各関係者にも、インタビューの実施およびその公表の仕方について了承を得た。

2) 分析方法

具体的な分析は、「軽度」肢体障害者における障害の意味を「通時的変化」と「現状」という時間枠から分析した田垣(2002)に依拠して行なった。また、子どもの生活に分析的に迫る上で参考になるのは、リッジ(2010)が示した「子どもたちの生活において重要な3つの領域」である。そのため、「経済的・物質的側面」、「学校生活の社会的・関係的側面」、「家庭環境や個人的な生活ならびに家族生活」の3領域を分析視点として採用した。ただし、リッジは、学校での授業や家庭での学習および塾など学業面にはあまり触れていない。本研究では、それらを重要な側面として扱うことから、「学校生活の社会的・関係的側面」を「学校生活の知識的・社会的・関係的側面」と補充を行なった。そして、「経済的・物質的側面」や「家庭環

境や個人的な生活ならびに家族生活」が「学校生活の知識的・社会的・関係的側面」とどのように関係しているのかに着目した。

分析手法は、以下の通りである。(1) 録音した逐語記録をエピソードに区分する。(2) エピソードを、「幼少期」「小学校」「中学校」「高校入試時期」と時系列に沿って再構成する。(3) 再構成したエピソードを「経済的・物質的側面」、「学校生活の知識的・社会的・関係的側面」、「家庭環境や個人的な生活ならびに家族生活」というリッジの分類を参考にし、ライフストーリーを作成する。

3) 調査結果

3 領域に目を配りながら、幼少期から高校入試時期までのライフストーリーに着目したことで、時間軸を追いながら横断的に分析することが可能となった。それぞれのライフストーリーを作成し、分析を行なった結果、彼/彼女たちはさまざま特徴的な過程を経ていることが明らかになった。今回は、その特徴がもっとも顕著にあらわれており、今後のリスクが高いと考えられる女子 3 名に特化して報告を行う。彼女たちには、以下のようなプロセスが見出せた。

①彼女たちは幼少期から中学校時代にかけて経済的困窮を起因のひとつとして家庭内不和や離婚、引越しを経験していた。そして、家庭が不安定であると同時に、学校生活では落書きやネット等への没頭が生じていた。この時期に学校での学習が遅れたことは明らかであろう。高坂(2008)によれば、中学生は知的能力が重要領域であり、学業成績が悪いことにより劣等感を強く抱く傾向があるという。すなわち、彼女たちが相対的に低位の学業達成であったことは、自己肯定感や自己効力感を低めたと考えられる。

②そのなかで彼女たちは、家族に必要とされる形で重点的に家事に時間を費やすようになる。それは、友だちがやらない役割でもあるため、自己肯定感の獲得という意味が付加されて行なわれていると考えられた。だからこそ、家庭が不安定でありながら、家庭の重要性も高まるのである。本研究では、子ども自身が家庭の中に引きつけられ、個々のふるまいや選択の基点が家庭生活の維持/向上におかれることを「家庭の準拠」と名付けた。

後期近代においては、「集団的アイデンティティにもとづく存在論的安心の基盤」が失われるために、その結果生じる存在論的不安への対処は、自己アイデンティティの獲得によってなされるという(権 2007)。おそらく彼女たちは、家事を日々遂行することによって、自己肯定感のみならず自己アイデンティティの獲得もしているのだと考えられた。

③彼女たちはネットや携帯にも深くコミットした生活を送っている。そして、家庭が不安定な状態であり、内申点なども不十分であるなかで、高校入試の時期を迎える。つまり、「家庭の準拠」を強め、高校入試に向かっていないライフスタイルが維持されたまま、彼女たちは低位の進路にたどり着くのである。

本研究の知見からは、今後の支援策として以下の 2 点が導かれた。第一に、家庭に対する生活支援を拡充することである。第二に、さまざまな状況の子どもがいることを想定し、自己肯定感や自尊心を高めうる教育活動や支援活動がさらに取り組まれる必要があるということである。

3. 研究目標の達成状況

実施計画書をもとに、本研究はほぼ計画通りに遂行された。生活保護世帯の子どもを対象にインタビューを行い、ライフストーリーに着目し、なぜ彼/彼女たちが低位の進路にたどり着きがちであるのか、そのプロセスを明らかにしてきた。そもそも子どもが日常生活の中で、家事役割を担っていることやその内実は、これまでの調査研究からはあまり見えてこなかったことである。

後期近代という視点は、研究を進めるなかで得られた視点であったが、子どもたちが生きる日常生活を社会的な時代把握に照らし合わせながら考察できたことで本研究のスタンスがある程度定められた。

また本研究は、社会的な意義が問われるテーマを掲げていることを意識し、知見から導かれる社会的支援や学習支援について提言を行なった。

4. まとめと今後の課題

本研究では、生活保護世帯の子どものライフストーリーに着目し、なぜ彼/彼女たちが相対的に低位の進路にたどり着くのかを明らかにしてきた。また知見から導かれる社会的な支援策を提示した。今後は、対象者を増やししながら、「高校入試」以外にも焦点をあて分析を行いたい。また性別により、経験の仕方や語りに違いがみられるのかについても検討を行いたい。

5. 研究成果

[1]林明子(2012)生活保護世帯の子どもの生活と進路選択—ライフストーリーに着目して—、『教育学研究』第 79 巻第 1 号,日本教育学会, p.13-24.